

「マンガを研究する」とはどのようなことか。私たちは、この行為をどのように定義すればいいのだろうか。最近こんなことを考えるようになった。京都精華大学の大学院でマンガを研究する学生を指導する立場になるとともに、国際マンガ研究センターの研究員を拝命したのが直接のきっかけである。

私は現在、芸術学と美術史の方法論を使ってアニメや特撮などの隣接分野も含んだ広義の「マンガ」におけるキャラクター表現の歴史を研究している。なぜ学生時代に美術を学んだのか。これはシンプルな話である。単に私が受験生だった時代にはマンガ学部が存在していなかったので、絵画史や理論を専攻する以外にマンガを研究する方法が思いつかなかったのだ。マンガの大学院に所属する日が来るとは夢にも思っていなかったというのが正直なところである。

今やマンガが大学で教えられる対象になり、行政が権威ある文化ないし芸術としてこれを扱いはじめている。教員ないし組織人としてはこの現状を歓迎すべきなのだが、個人としての私はあくまでもカウンターカルチャーであったからこそマンガを愛しているのであって、この文化が権威性を帯びていく流れをあまり喜んではない。いろいろと思うことはあるのだが、それをここに書いてもしかたがない。オタクのおじさんとしての私の気持ちは飲み屋で話すことにして、ここからはもっぱら公の立場から「マンガを研究すること」について考えてみることにする。

「マンガを研究すること」と「マンガ学」とでも呼ばれるべき学問領域で研究することはイコールではない。もちろんマンガ研究は存在するし、今までに蓄積されてきた成果は目を見張るものがある。ただし、学問とはまず当該分野のディシプリンを身体化し、その適切な運用によって成立させるべきものであるという——それこそ美術の世界のような——古風な考え方にのっとるならば、「マンガ学」はまだ成立していないか、すくなくとも成立の途上にあるとしかいえない。

「マンガ学」は、いまのところ文学や音楽、美術などの伝統的な芸術分野にみられるような体系的なカリキュラムを組める段階には至っていない。つまり、学部1回生から2回生のうちは当該分野の歴史や理論の基礎を積み上げるために用意された必修科目の多さに翻弄されるという、初学者の通過儀礼が設けられるだけの規範がまだないのである。また、それらの専攻では3回生になってゼミに所属するところによりやく興味を向ける対象を自分で選ぶことが許されるのが一般的だと思う。古い芸術や学問においては、体制から許可されなければ自由は得られない。

さて、研究を志す者はそれなりの野心をもって卒業論文を書き、大学院に進む決心をする。彼(女)らは専門分野と語学の筆記試験、そして論文審査と口頭

試問からなる「院試」をクリアして研究者としての下積みを始め、さまざまな障害を乗り越えた者が修士号や博士号を取得する。マンガ研究には、良くも悪くもこのルートがない。人文社会系を中心とする他分野の学問を修めた人や、批評家、評論家を中心とする文筆家がそれぞれの方法論や知見を持ち寄ってマンガを研究しているのが現状である。

マンガ研究の目的はマンガの研究なので、多様な分野の人々がマンガを論じて知見を積み重ねている現在のやり方が妥当であることは言うまでもない。ある枠組みを規定すれば「マンガ・スタディーズ」とでも呼ぶべき学際的な方法論とコミュニティの形成もある程度は可能だと考えられるし、現在の関連諸学会や出版の動向を鑑みるに、マンガ研究はしばらくこの方向に進んでいくだろう。そもそも昔はマンガ学部などなかったのだから、私も私の同僚も総じて生え抜きのマンガ研究者ではない。ゆえに、この世代の人間がマンガ研究の中心でいるうちは「マンガ・スタディーズ」的な路線を志向するのではないか。

いっぽうで、マンガ学部やマンガ研究科が存在する以上は「マンガ学」の制度的枠組みを確立してプロパーのマンガ研究者を育成する体制を整えなければならないという考えもある。なぜなら学位は古来の大学制度のもとに授与される権威そのものだからだ。では、その「マンガ学」は、いったいなに学に分類されるディシプリンを持つのだろうか。

そのディシプリンは、おそらくマンガ史とマンガ表現論を学問体系の基礎に据えるだろう。そうしてマンガの歴史と理論を体系化・規範化した「マンガ学」は、文芸学や音楽学、演劇学など同様の個別芸術学に区分されることになるはずだ(ちなみに、たんに「芸術学(Kunstwissenschaft)」という場合は「美術学」のニュアンスが強い)。したがって、「マンガ学」は美学と関連する学問領域ということになる。美的なもの一般についての原理的・理論的探究が美学の目的であり、その考察対象を芸術に限定したのが芸術学だからである。

さて、そのような古式ゆかしいスタイルの「マンガ学」が現代において必要とされるのかどうかは私にはわからない。ただ、「マンガ・スタディーズ」を目指すにせよ「マンガ学」を打ち立てるにせよ、今の学生たちが「先生」と呼ばれる立場になったところに役立てられるような研究と教育の基盤を形成しておくのが我々の世代に与えられた役割だと思う。我々の人生はその土台づくりで終わるだろう。しかし、それもなかなかカッコいい仕事ではないか。